

## 指宿市考古博物館 時遊館 COCCO はしむれ

「もっと大好き！指宿展—海に開かれた私たちのまち—」

開催期間：平成28年12月17日（土）～平成29年2月26日（日）



### 【企画展の内容・目的】

- 薩摩半島の最南端に位置し、古来「海の玄関口」であった指宿の海にまつわる文物を、自然・歴史・考古学・民俗・産業といった様々な視点から紹介することにより、次世代も含めた幅広い年齢層に対して海と人との共生の歴史について知る機会とすることを目的に実施した。
- 市内の水産業や造船業、鹿児島海の特性の概要を紹介し、地域の海の特性や海が果たす役割や重要性を生涯学習の一環として知る機会とした。
- 関連事業として、漁業士や専門科による講座や、海洋地形や海の信仰に関する神社等を巡るフィールドワーク、魚の体の仕組みを学びながら魚さばきと調理体験を行うワークショップ等を開催し、海とのふれあいや、海と人とのつながり、「海と人との共生」について学び、海をテーマに自発的・積極的に活動できる人づくりと地域づくりの礎とした。

# 1. 企画展示の内容

- 開催期間：平成28年12月17日（土）～平成29年2月26日（日）
- 開催場所：指宿市考古博物館 時遊館 COCCO はしむれ 特別展示室
- 入場者数：1,547人



指宿市考古博物館 外観



薩摩半島の最南端に位置し、古来「海の玄関口」であった指宿。当企画展では、指宿の海にまつわる文物を、自然・歴史・考古学・民俗・産業といった様々な視点から紹介した。

## 【海洋教育のねらい① 海に親しむ】

### 「第1章 “地果て海はじまる” 指宿」

◎導入部分として、指宿が海に囲まれており、「人と海との関わり」を考える上で重要な地域であることを紹介した。江戸時代の文献を紐解きながら、海にせり出してそびえる開聞岳がかつて「海神」であったことや、地域に伝わる龍宮伝説と、“龍宮からきた”との伝承がある酒甕等を紹介することで、歴史・文化の視点からも【海に親しみ】をもたせることができた。

◎江戸時代に琉球使節団が奉納した「琉球扁額」を市内の神社から借り受けて展示することで、昔の人々の海を越えた交流を示す証が地域に残っていることを知る機会とした。

### 「第3章 海に浮かぶ知林ヶ島一島と人との来歴一」

◎市の観光資源でもある、砂洲で対岸の陸と繋がる「知林ヶ島」とその周辺の海の生物等を紹介した。身近な自然を取り上げることで、海への興味・関心を喚起した。



## 【海洋教育のねらい② 海を知る】

### 「第2章 指宿の舟と船 今昔」

◎第2章では、県内の博物館や施設から、海を越えた「人」と「文物」の交流や海への信仰を示す考古・歴史・民俗資料（指定文化財を含む）を借り受けて展示した。これにより、古来人々が海を介して広域につながっていたことを理解し、【海を知る】効果が得られた。

◎縄文時代～古墳時代の漁撈具（釣針・石銛・蛸壺等）や縄文時代の真珠、南西諸島から指宿に運ばれてきた縄文土器等を展示し、古代から人々の生活に海との関わりがあったことを知る機会とした。

◎市内の水産業や造船業、鹿児島島の海の特性の概要を紹介することで、地域の海の特性や海が果たす役割についての知識を深めることにつながった。

◎古代から近現代にかけての、舟に関する信仰を表わす資料を展示した。縄文時代・古墳時代の軽石で作られた舟や、現代の郷土玩具「舟車」、大漁旗を借り受けて展示したほか、特に、初公開である利永神社の木彫りの「舟の御神体」は、来館者の関心が高かった。



## 【海洋教育のねらい③ 海を利用する】

### 「第4章 塩—かつて指宿を支えた産業—」 「第5章 山川鯉節の百年とこれから」

◎第4章は、かつて市の主要産業であった製塩業と、現在の市の主要水産物である鯉節の最高級品「本枯れ節」、ふたつの産業史について学ぶことで、指宿市を囲む海の果たす役割と、人間生活との深いつながりを意識し、海の資源の利用価値について考えさせる展示とした。

◎製塩業の歴史を紹介するとともに、市内沿岸部の集落に残る塩の神様を描いた掛軸等、塩に関する信仰を紹介することで、【海を利用】した産業が身近な生活の中に残っていることの気づきにつながった。

◎鯉節職人の方々へ趣旨説明の上、聞き取り調査や展示資料の提供を受け、鯉節の製造過程や歴史について映像やパネルで展示した。これにより、市民が【海を利用する】海洋教育の展示に参加する場の創出につながった。



## 【海洋教育のねらい④ 海を守る】

### 「第6章 海に開けた指宿の未来」

◎第6章では、展示のまとめとして、指宿市で進みつつある砂浜再生事業や、豊かな海洋資源を持続させるための漁業士の取組み「藻場造成」について学び、地域の【海を守る】重要性を再認識させる内容とした。

◎指宿で砂浜を利用してきた歴史（砂蒸し温泉、浜競馬等）の紹介に加え、最新の防災情報を踏まえながら、指宿の砂浜再生の取組みを紹介するパネル展示を行ったことで、海洋教育の課題のひとつである「防災教育」の機会を創出した。

これら第1章～第6章の展示を見学することで【海と人との共生】の歴史と、地域の海の未来へ向けた課題の理解することにつながった。

## 【来館者の声】

### 【海に親しむ】

○今まで何気なく見ていた海も、視点を変えると面白いことが多くあると思った。（27歳・男性）

### 【海を知る】

○指宿の海に関わる歴史と文化がよくわかった。市民でありながら知らないことばかりと痛感。今後も引き続き指宿の魅力を発信してほしい。（57歳・女性）

○古代の人が日々の暮らしの中で考え、工夫して漁をしていたのだと思った。昔も今も美味しい魚が食べられることに感謝。（45歳・女性）

### 【海を利用する】

○指宿も塩づくりをしていたと知って驚いた。（31歳・女性 29歳・女性）

○鰹一本釣りの竿が迫力。指宿と鰹のつながりを知ることができた。（35歳・男性）

○海産物から海の恵みを感じることができた。（45歳・男性）

### 【海を守る】

○海を大切にしようと思った。（13歳・男子）

○海を大切にすることで健康被害を防ぐことができると思う。海には夢のかおりがする。（55歳・男性）

## 2. 関連事業の内容

### ■関連事業名①「指宿の先端海洋技術を学ぼう」

【開催日時】平成29年1月21日（土）14:00～16:00

【開催場所】鹿児島県水産技術開発センター

【参加者数】36人

【実施内容・目的】

- 鹿児島県水産技術開発センターと連携し、センターで調査・研究されている、環境に優しい養殖業や水産加工技術に関する講話を聞き、海に開けた指宿における21世紀の魅力ある水産業を学ぶ講座を実施した。未来に向けた「海と人との共生」に関しての知識を学ぶことで、自発的に「海を守る」意識をもたせることを目的とした。
- 海の生物を見て、触れる体験を通して「海に親しむ」機会を創出した。



開催場所の全景の様子



鹿児島と指宿の水産業についての概要説明



鹿児島県水産技術センター研究員の方から、まずスライドを用いて鹿児島と指宿の水産業についての概要説明をいただいた。その後、施設内を見学しながら、漁業情報システム運用、漁場開発調査、種苗生産技術研究、赤潮被害対策等の研究成果について、パネルや模型を用いてわかりやすく解説いただいた。これにより、参加者が豊かな地元の【海を守る】ことの重要性を意識することにつながった。



その後、放流用の魚（稚魚）や稚貝などの生態展示を見学した。魚の生態に関する豆知識を交えながらの解説に、参加者からは質問が活発にあがっていた。



最後に屋外の水槽で、ワカメ、アオサ、シラヒゲウニ等に実際に触れる体験を行った。身近な海の魚を実際に見て、触れることで、【海に親しむ】ことを体感することができた。また、かけがえのない地域の海の存在と魅力に目を向け、【海を守る】ために何ができるのかを自発的に考えさせる機会づくりとなった。

### 【来館者の声】

- 生きた実際の生物に触れあえてよかった。(37歳・女性)
- 海に親しむことで知識が何十倍にもふくらむ可能性があると思う。(41歳・女性)
- 地元の海を手で触れることができた。海に囲まれている鹿児島を改めて感じた。(59歳・女性)
- 海の資源は自然のままでは衰退の一方。人間が手を加えて助けてあげることが海を守ることになると感じた。(71歳・女性)
- これから益々栽培漁業が必要になってくると感じた。(69歳・男性)

## ■関連事業名②海の講座(1)「古代の土器で塩づくりと炊飯体験」

【開催日時】平成28年8月6日(土) 9:00 ~ 12:00

【開催場所】国指定史跡指宿橋牟礼川遺跡 史跡公園

【参加者数】45人

【実施内容・目的】

- 博物館展示資料製作者／体験企画提供者である琴鳴堂と連携し、課題解決型の体験活動として、製塩土器のレプリカを使用して海水から塩を得、試食する体験を行った。
- この体験を通して、児童・生徒が、人は昔から海を生活の中で利用してきたこと、そして海の利用価値について、効果的に学ぶことを目的とした。



開催場所の全景の様子



事前説明(ねらい・予想)



課題解決型の体験活動を目指し、講師との打ち合わせの上、事前説明を入念に行った。海水はそのままの濃度のものと、事前に4倍に濃縮したかん水とを用意し、子どもたちは、古代人と同じ方法で海水から本当に塩がとれるのか？ どれくらいの時間がかかり、どれくらいの量がとれるのか？といった疑問に対して、予想をたてる作業をしてから、実験を開始した。



点火から1時間30分後、1ℓの海水から約25gの塩をとることができた。講師からは、生き物が生きていくためには塩が必要であるが、塩をとるのは大変であること、そして、古代の人々は広大な海を利用して塩を得ていたこと等を説明いただいた。



その後、塩はかまどと土器で炊いた古代風の豆ご飯につけて試食した。製塩土器は、1人1つずつ持ち帰り、帰宅後も学習ができるようにした。

この体験を通して、昔から人が【海を利用】して、苦勞しながらも生きていくために必要な塩を手に入れていたことを学習することができた。

なお、製塩実験の結果はパネルにして企画展の中で展示し、使用後の製塩土器は古代の製塩の模型としてあわせて展示した。この連携により、【海を利用する】ねらいの効果を上げることができた。

## 【来館者の声】

### 【児童・生徒の声】

- はじめて海水と土器から塩ができることを知った。いつも食べている塩に比べて甘かった。(11歳・女子)
- 昔の人も塩を食べていたことがわかった。塩がついた土器は宝物になった。(6歳・男子)

### 【保護者の声】

- 海水から塩はわずかしかとれないことに驚いた。(38歳・女性)
- 古代人が海水を煮詰めて塩を作っていたことを親子で体験できてよかった。(44歳・男性)



## ■関連事業名②海の講座(2)「漁業者の取組み」

【開催日時】平成29年1月21日(土) 13:00 ~ 14:00

【開催場所】鹿児島県水産技術開発センター

【参加者数】36人

【実施内容・目的】

- 鹿児島県漁業士会会長(山川町漁業協同組合員)を講師に招き、「藻場造成」を中心に、海の資源を守るための取組みについて学ぶ講座を開催した。
- 講座で地元の漁業士の方から直接お話を聞く機会をつくることで、持続的に海の資源を得るために「海を守る」ことの重要性を、自発的に考えさせることを目的とした。



開催場所の全景の様子



【導入】漁師の仕事内容の紹介



導入として、講師の方の自己紹介を兼ねて、家業の漁師を継いでからこれまでの苦労話を交えながら、漁業者の取組みについてお話をいただいた。

その後、「藻場」の役割と重要性、山川地区藻場保全会で行っている、藻場の回復を目指した取組みについて紹介していただいた。地元の海底の様子を写真や映像で紹介いただき、参加者の強い興味・関心を引いていた。



さらに、藻場造成のために保管しているアマモの種子の実物を観察する時間を設けた。

漁業士の生の声として、「海を守る」「海洋資源を守る」ことの重要性について話を聞くことで、参加者がかけがえのない地域の海の存在と魅力に目を向け、【海を守る】ために何ができるのかを自発的に考えさせる機会づくりとなった。

### 【来館者の声】

- 漁師の皆さんのおかげで安心して魚が食べられると感じた。(72歳・女性)
- 海は大切な宝物の宝庫であると感じた。(83歳・女性)
- 山川町漁協青年部の活動に参加して、もっと海に触れてみたい!(37歳・女性)
- 海と私たちの生活との関わり、そして大切さ、自分にできることは何かと考えることができた。指宿の産業としての「海」と生活の基盤としての「海」について考えることができてとても勉強になった。(42歳・女性)
- 自分たちの力で、海を改善することができることを学んだ。(42歳・男性)
- 海のことをもっと多くの人たちに関心をもってほしいと思った。(57歳・女性)

## ■関連事業名③ワークショップ「魚さばきと調理体験」

【開催日時】平成28年7月22日（金）13:00～17:00

【開催場所】岩本漁協、今和泉海岸

【参加者数】70人

【実施内容・目的】

- 指宿漁業協同組合と連携し、トビウオやタコの体のしくみを学びながら、さばいて調理するまでの体験を行った。
- この「海に親しむ」体験により、海と海産物に対する関心を培い、海に進んで関わろうとする児童・生徒の育成につなげることを目的とした。



開催場所の全景の様子



事前説明の様子



魚さばきと調理には、トビウオ・イカ・タコを用いた。

まず、岩本漁協を会場として子どもたちが集合し、漁師の方々が、それぞれの生物の体の仕組みと特徴を教えながら、さばきかたの見本を見せた。

特に、タコの急所を歯で噛んで息の根を止める方法や、塩でぬめりをとる方法に驚きの声があがっていた。



次に、グループ毎に分かれて、子どもたち自身が魚をさばく作業を行った。

最初はおっかなびっくり魚に触っていたが、次第に魚の特徴を観察しながら、進んで作業をするようになっていった。漁業協同組合と連携したことで、ただの調理体験ではなく、海の生き物に触れ、学ぶことができ、「海に親しむ」機会づくりとなった。



次に、場所を近くの今和泉海岸に移動し、さばいたトビウオ等を焼く調理体験を行った。

近年魚ばなれが進んでいる中で、魚を調理して食べるまでの一連の経験を自分たちの力で行ったことで、参加者が、今後進んで海の恵みである魚に興味・関心をもつことが期待される。また、海岸で調理をしたことで、海岸にゴミが多く落ちていることや、砂浜で砂鉄が採集できることに気づいた参加者もあり、きれいな「海を守る」気持ちも喚起することにつながった。

### 【来館者の声】

- 特にタコをさばくのが楽しかった。(15歳・男子)
- 海にはたくさんの生き物がいる。生き物は大事だと感じた。(12歳・女子 ほか)
- 海からいろいろな命をもらっていると感じた。(12歳・男子)
- きれいな海を守りたくなった。(10歳・女子)
- 海があるから魚も貝も食べられる。海は大切だと思った。(11歳・男子)

## ■関連事業名④フィールドワーク

「指宿の海洋地形と人との関係の歴史を知ろう」

【開催日時】平成29年2月19日（日）9：00～12：00

【開催場所】山川地域～開聞地域一円

【参加者数】38人

【実施内容・目的】

- 企画展の内容に関連する、市内の海浜地形や製塩工場跡、神社等の現地を見学するフィールドワークを実施した。これにより、地域の「海を知り」、また「海を利用した」産業についての理解を深めることを目的とした。



開催場所の全景の様子



展望台での趣旨説明の様子



はじめに、山川湾や製塩工場跡を見渡すことのできる展望台で、日程と趣旨の説明を行ったことで、参加者が「海の学び」を意識して現地を見学することができた。

見学コースは下記のとおりである。

成川展望台・成川浜製塩工場跡⇒伏目海岸・製塩工場跡⇒長崎鼻⇒龍宮神社（豊玉媛を祀り、海上救護として知られる神社）⇒川尻海岸でのオリビン採集（火山活動でできた海岸で宝石オリビンを採集する）⇒川尻の塩釜神社（塩づくりの神様への信仰を感じられる神社）⇒枚聞神社（「海神」開聞岳を祀る神社。琉球使節団が奉納した琉球扁額等を所蔵）⇒玉の井（龍宮伝説に関連する史跡）



講師は、当館学芸員に加え、指宿まるごと観光ガイド会や指宿ジオパーク研究会の会員に協力をいただいた。事前研修の上、開催趣旨と情報を共有することで、ガイドが現地を案内する際に、指宿が海に囲まれていることや、これまで海が果たしてきた役割、「海と人との共生の歴史」の理解を軸として解説をすることが可能になった。この取組みにより、「海洋教育の担い手となる人材育成」※につながった。

※海洋政策研究財団 「小学校における海洋教育の普及推進に関する提言」（平成20年）



参加者の多くが、事前に企画展を見学した方々であった。当関連事業の実施により、海に関する指宿の自然・歴史・民俗・文化について、現地を見て・体験することで理解が深まり、「海と人との共生」を実感する機会をつくることができた。

### 【来館者の声】

- ガイドの説明があり理解が深まった。海の豊かさや諸国との交流を学ぶことができた。（69歳・男性）
- 川尻海岸で話を聞いて、オリビンを拾った活動が一番良かった。（11歳・女子）
- 海は心を落ち着かせると感じた。（68歳・男性）
- 海のめぐみを受けて今の生活があるのかな。（73歳・女性）

## ■関連事業名⑤いぶすきシェルコレ 2016 貝の世界

【開催日時】平成28年7月1日（金）～平成28年9月4日（日）

【開催場所】指宿市考古博物館 時遊館 COCCO はしむれ 2階ロビー

【参加者数】2,140人

【実施内容・目的】

- 指宿市在住の貝類研究者と連携し、多種多様な貝殻標本の展示や、貝殻採集地点や標本の作り方の紹介をすることで、夏季休業期間における児童・生徒の学習支援の一助とした。
- 来館者に海の生命の多様性を感じてもらおうと同時に、「海に親しみ」をもち、今後も進んで「海を知り」「海を学ぼう」とする児童・生徒の育成につなげることを目的とした。



開催場所の全景の様子



貝類研究者による事前指導の様子

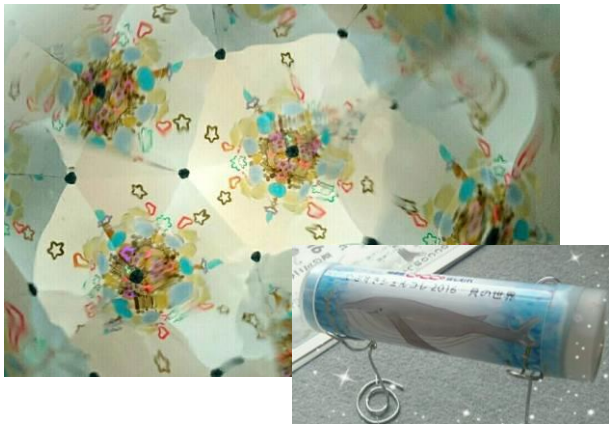


開催にあたって、事前に貝類研究者から市内の貝殻採集スポットや標本の作り方、貝の生態に関する情報提供をいただいた。また、指宿市内で採集された貝殻の標本をはじめ、南西諸島や世界の珍しい貝殻標本 約 1,700 種を借り受けて展示することができた。

貝殻標本は、「巨大な貝」「美しい貝」「不思議な形の貝」といったテーマで展示したほか、貝輪として用いられたゴホウラやイモガイ、貨幣として使われていたタカラガイ、竹取物語に登場するハチジョウダカラガイ等を「古代人が利用した貝」として紹介したことで、人が昔から貝を利用していたことへの理解を深められるよう工夫した。



市教育委員会学校教育課と連携し展示会の周知をしたことで、開催機関中、自由研究に取り組む児童・生徒が、海へ行って採集した貝殻を持参し、貝の名前や生態を調べている様子が多く見られた。このことから、この事業が当初の目的であった「海に親しみ」をもち、今後も進んで「海を知り」「海を学ぼう」とする児童・生徒の育成につながったと考えられる。



期間中は関連イベントとして、「海の宝石☆シーグラス万華鏡作り」や「巻貝を器に☆多肉植物寄せ植え体験」といった体験学習を行った。ただものづくりをするだけでなく、事前に市内の海岸や貝殻の特徴について説明することで、参加者が「海に親しみ」ながら体験を行えるようにした。

### 【来館者の声】

- 海にはいろんな生き物がいて、それぞれ違う特徴をもっていることを学んだ。(11歳・女子)
- 海にはいろいろなものがあるんだな。海ってすごいなと思った。(10歳・女子)
- 貝や魚が安全に暮らせる環境を作りたい。(12歳・女子)
- 「巻貝を器に 多肉食物寄せ植え体験」に参加。海へ貝殻探しに出かけたいと思った。(21歳・女性)



## 【事業全体のまとめ】

本サポート事業を活用したことで、県内の各博物館・団体と連携した資料の借用や、来館者の学びを深める豊富なパネルの製作と展示設営、さらに企画展と連動した関連事業の実施が可能となり、社会教育・生涯学習の一環として、【海と人との共生】の学びの場を創出することができた。

具体的には、借用資料運送業務委託料の助成により、指定文化財を含めた貴重な考古資料や民俗資料の借用が叶ったこと、他館との連携調査で新たな資料の掘り起こしができたこと、印刷製本費の助成により、ポスター・チラシによる事前の広報活動ができただけでなく、企画展の内容をまとめた図録の発行が可能となり、来館者の「海の学び」の事後学習につなげることができたこと等が挙げられる。

参加者のアンケートからは、幅広い世代から「海に関する歴史・文化・産業を学べた」「海の恵みを受けて今の生活があると感じた」「自分たちにできることをして、海を大切にしたい」といった感想が寄せられた。これより、自発的に海を知り、守っていこうとする意識がうかがえ、本サポート事業により、当初の目的であった「海洋教育の推進」が図られたと言える。

## 3. 主な連携・協力先について

連携・協力先名称	連携・協力の内容
1. 鹿児島県水産技術開発センター	○指宿市のまわりの海や海洋生物に関する情報提供 ○関連事業①「指宿の先端海洋技術を学ぼう」受け入れ、講師協力
2. 指宿漁業協同組合 山川町漁業協同組合	○関連事業③「魚さばきと調理体験」受け入れ、講師協力 ○鯉漁一本釣漁や鯉節生産に関する資料の借用。 ○関連事業②「海の講座」講師協力
3. 山川水産加工業協同組合 ／組合員(市内の鯉節職人)	○市の鯉節の歴史に関する連携した資料調査の実施。 ○鯉節に関する取材・映像製作協力、資料借用。
4. 鹿児島県立埋蔵文化財センター ／始良市教育委員会 ／鹿児島市教育委員会	○漁撈具、製塩土器等に関する情報共有と基礎的研究。 ○市指定文化財を含む考古資料の借用。
5. 指宿港海岸保全推進協議会	○「指宿港海岸直轄海岸保全施設整備事業」に関する情報提供、パネル借用。
6. 指宿まるごと観光ガイド ／指宿ジオパーク研究会	○関連事業④フィールドワーク「指宿の海洋地形と人との関係の歴史を知ろう」講師協力
7. 琴鳴堂（四元 誠氏）	○関連事業②「海の講座」講師協力 ○展示資料（レプリカ）提供
8. 貝類研究者（中島 耕作氏）	○関連事業⑥「いぶすきシェルコレ 2016 貝の世界」指導、資料借用。

#### 4. 主な広報結果について

掲載媒体名	見出し、掲載日
1. 読賣新聞社	「世界最大の巻き貝など展示」平成 28 年 7 月 22 日 「指宿の海多様な魅力」平成 28 年 12 月 22 日
2. 南日本新聞社	「海に開かれたまちの魅力」平成 29 年 1 月 5 日
3. MBCラジオ	「いぶすきシェルコレ 2016 貝の世界のご案内」 たんぼぼクラブ 平成 28 年 8 月 11 日 「時遊館 COCCO はしむれ企画展のご案内」 平成 28 年 12 月 13 日
4. 指宿市広報誌	「シェルコレ 2016 貝の世界」『広報いぶすき』6月号 「学びのふるさと講座」『広報いぶすき』7月号 「もっと大好き！指宿展—海に開かれた私たちのまち—」 「二つの龍宮—開聞岳—帯と長崎鼻—」『広報いぶすき』12月号 「学びのふるさと講座「海の講座」」「はしむれ日曜講座」 『広報いぶすき』1月号 「もっと大好き！指宿展始まる 指宿ならではの海の魅力が満載」 「川尻に伝わる「塩釜どん」の掛軸」『広報いぶすき』2月号

以上